これからの仮設住宅への
福島からの提言

ＮＰＯ法人　ユニバーサルデザイン・結（ゆい）

http://www.ud-yui.com

東日本大震災

平成23年3月11日午後2時46分

マグニチュード9.0国内史上類を見ない巨大地震が発生。

岩手、宮城、福島に激甚な災害となる。

福島県は、東京電力福島第一原子力発電の原発事故により県内外に15万人超える人々が、今なお避難生活を余儀なくされている。

現在進行形で、収束の見通しは立っていない。

福島県の特徴

・ 住んでいた家・くらし・仕事から

移り住む

・避難人口の多さ
・転々とした避難所生活
・仮設住宅への転居

長期化・見通し立たず・ミスマッチ

・家族がばらばら

応急仮設住宅とは

- 災害救助法第23条第1項第1号「収容施設」と定義付け
  入居期限（2年間以内）や標準的な仕様が定められている
- 各自治体とプレハブ建築協会と協定
  1ヶ月でスピーディに＆合理的に
  プレハブ仮設住宅を建築する契約

制度の壁

仮設住宅は誰が建てる？

- プレハブ仮設住宅・・・プレハブ建築協会の規格建築部会の会員が建築する鉄骨組立構法
- ハウスメーカー仮設住宅・・・プレハブ建築協会の住宅部会の会員であるハウスメーカーが建設
- 木造仮設住宅・・行政が業者を公募

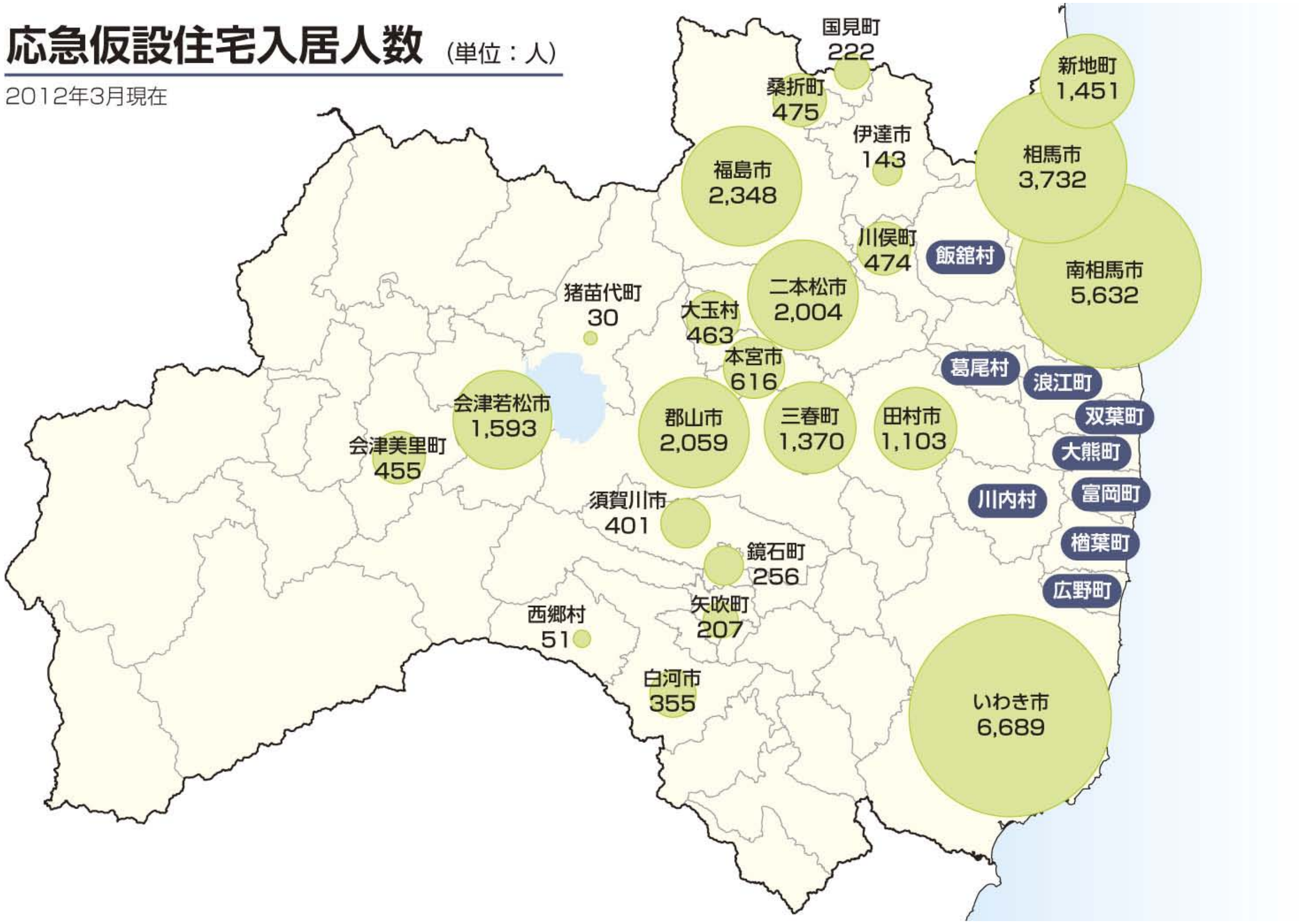
（地元公募型）

福島県の状況

- 当初必要戸数2万戸
- プレハブ建築協会の対応戸数が1万戸
- 公営住宅空き室、借り上げ住宅で6，000戸

- 不足4，000戸＝県が公募した（木造）

避難：双葉郡8町村と飯館村

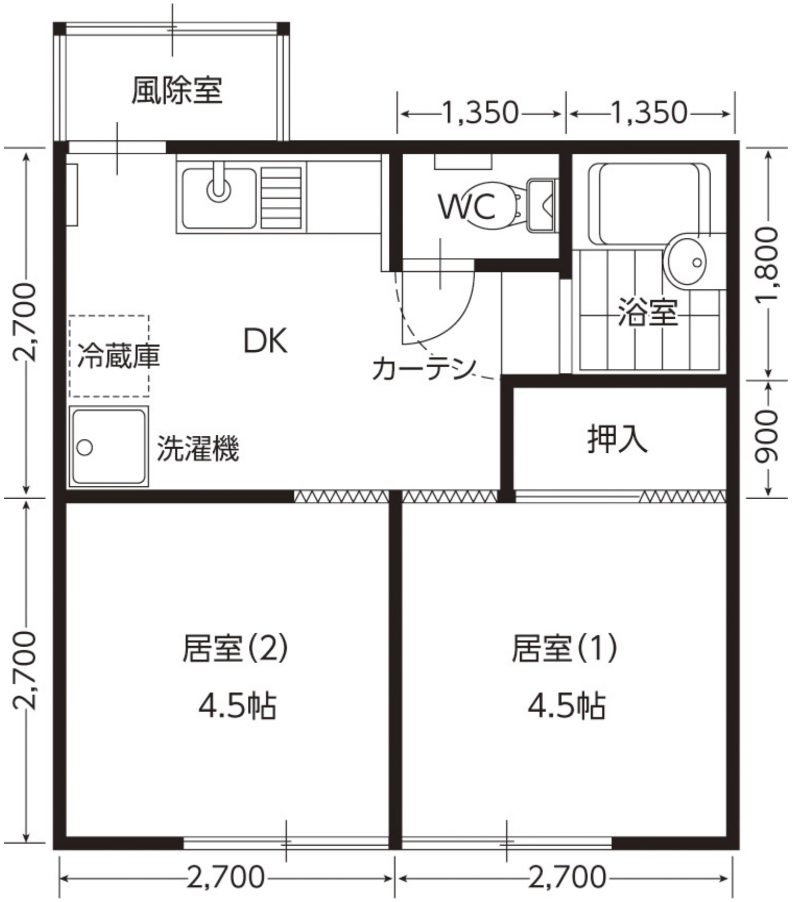


事業内容
(アンケート実施：福島県UD推進協議会)

- **応急仮設住宅UD調査**　　**住民アンケート調査**

調査①　プレハブ仮設住宅

- 浪江町→桑折町
- JR桑折町駅近く
- 交通の便よい
- 集会所3ヶ所
- 入居者213/286



調査①　プレハブ仮設住宅

玄関

キッチン

調査①　プレハブ仮設住宅

浴室出入り口

収納

住民の声

- 入居者には、65歳以上の高齢者が多い
- 元々、同じ地域に住んでいた人たち同士が近くになるように配慮する
- 断熱材や内窓の追加、押入れの枕棚は、標準にする
- 高齢者には、ツーバブル水栓は、危険
- 玄関には、スロープ設置、出入り口の有効幅員が狭い

調査②ハウスメーカー仮設住宅

- 楢葉町→会津美里町
- 会津工業団地内建設
- 断熱・ペアガラス
- 役場出張所
- 集会所2ヶ所
- 入居者数205/250

調査②ハウスメーカー仮設住宅

玄関

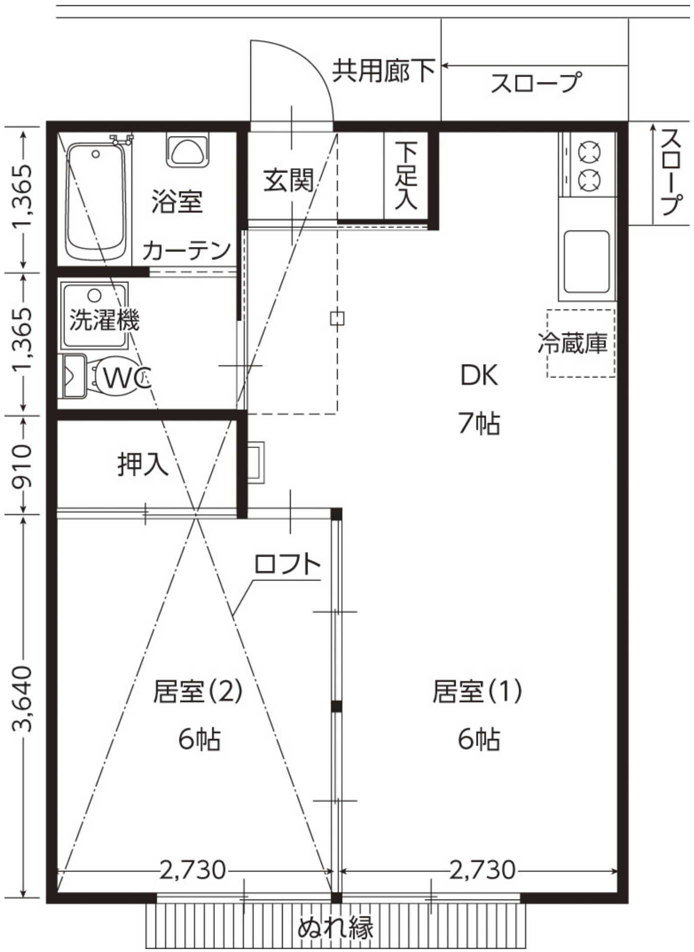
トイレ

住民の声

- 工業団地の中にあるため、中心部から遠い
- 玄関の段差を解消し、呼び鈴も必要
- トイレの収納は、絶対に必要
- 居室の床がフローリングのため、寒さ対策が必要
- 浴室の床、及び浴槽の底部に滑り止め効果がなく、高齢者には危険

調査③　木造仮設住宅

- 大熊町→会津若松市
- 会津若松駅近い
- 木造「板倉工法」
- 集会所1ヶ所
- 入居戸数44/54
- 違うタイプ住宅混在
- 天井高く、開放的
- ロフト付き収納力良い



調査③　木造仮設住宅

通路

室内

調査③　木造仮設住宅

浴室

ロフトをみる

住民の声

- 共用廊下の幅が狭く回転できない
- 違うタイプの仮設住宅と混在、不満の原因
- 下駄箱が付いていてよい
- DKのレイアウトがよい、自由に配置が可能
- トイレは広く使いやすく、洗濯室と脱衣室兼ねており、他の仮設住宅にはない
- 障子、木の温もりが温かい
- ロフト収納が抜群によい

問題点

1. 出入り口の段差
2. せまさ
3. 騒音
4. 夏の暑さ
5. 冬の寒さ
6. 室内の段差
7. 危険な浴室

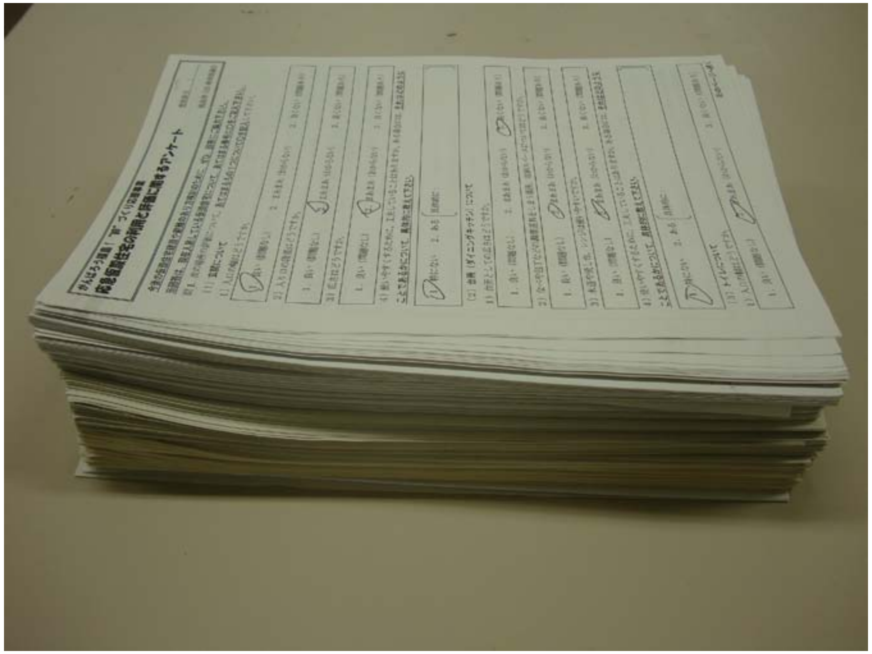
住む人の工夫と知恵

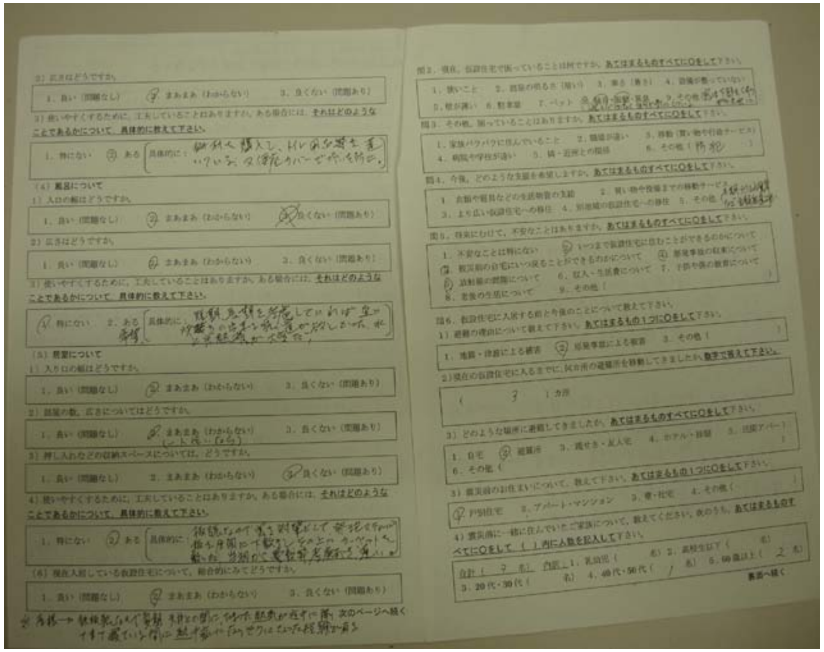
課題は多いが、少しでも快適に

- 風除室の活用・・・棚、突っ張り棒、ロープアイテムを駆使
- 窓にすだれ、壁面緑化で陽射しカット
- 玄関は仮設の顔・・・オリジナル表札、マグネットシート
- 物干し場にワザあり・・・干し場を作り出す

千里の道も一歩から

住民へのアンケート調査





アンケート調査・成果

- 住宅機能に関する評価項目のほとんどがマイナスの値
- 多くの仮設住宅利用者が同じ不満を抱えている
- 仮設住宅のタイプの違いや立地条件が，仮設住宅の評価に大きく影響を与えていることが分かった。

アンケート調査・課題

- 福島県の場合は，原発事故の影響による避難，入居が多いため，仮設とはいえ，長期化を見込んだ、最低限の人間の生活を保障できる住宅を造ることが急務。
- 震災の内容や居住地域の違いにより，過去の経験・蓄積を活かすことができない部分も見受けられている。一つ一つの課題に向き合い，解決していくことが必要。

実態調査・成果

- ユニバーサルデザインの専門家が調査したことによって、「生活者」の視点に立った現状と問題点を明らかにすることができた。
- ユーザーエキスパートの視点“誰にでもやさしく、使いやすい”という視点で調査したことで、多様性への配慮につながった。
- 地域に生きる建築家のネットワークを生かし、県内仮設住宅の建設状況を速やかに把握し、調査対象を的確に絞りこむことができた。

実態調査・課題１

- 今回の調査は「生活者」の視点から見た応急仮設住宅の実態と課題を明らかにすることができたが、調査した仮設住宅はほんの一部であり、さらに他の地域の仮設住宅を調査する必要がある。
- 長期化する応急仮設住宅での生活を見込み、今回の結果を自治体へ伝え、早急な改善を促すとともに、今後も継続した定期的な調査を実施し、評価していく必要がある。

実態調査・課題２

- 福島県の場合、原発事故収束まで時間がかかり、避難が長引くことが予想されたのではないかと思う。今後は、「仮設」をそのまま「復興住宅」に転用できるような運用基準、技術基準整備を検討するように提言する。
- 災害は、いつどこで起きるかわからない。「備えあれば憂い無し」と言うように、この調査によって提案した応急仮設住宅「ふくしまモデル」の標準化を進め、全国の市町村へ普及させる。

こんな仮設住宅なら住みたい

福島からの提言

- 原発事故収束まで時間がかかり、非難が長引くことが予想された時点で、「長期仮設住宅」を考える
- 地元産仮設住宅の推進
  各自治体で研究
- 仮設住宅建築システムの構築

福島復興のシナリオ

- 放射能汚染収束状況という時系列に応じた計画が必要
- 持続可能な生活を支える医療・職場・住居の整備
- 多様な供給パターンを準備

　グループホーム型・災害公営住宅・井戸端長屋等　中期・長期計画が必要

災害という状況下では・・・

心身ともに傷ついた人々を包む住まいが、
応急仮設住宅である。

だからこそ

従来の仮設住宅を再考し、「最低限の快適さ」
を保証。

ユニバーサルデザインは、「最低限の快適さ」であり、“おもいやり”から作られるもの

最後に・・・

福島の再生には、

UDなくして復興なし

思いやり、助け合いの心は、UDの原点

ご清聴ありがとうございました